

# 平成 26 年度 大阪大学職員研修

## 「図書館と貴重コレクション ～懐徳堂文庫/石濱文庫 を知る～」

平成 26 年 12 月 10 日 (水)

大阪大学附属図書館 総合図書館 6F 図書館ホール

### 【プログラム】

- |             |                                                         |
|-------------|---------------------------------------------------------|
| 14:00-14:05 | 開会挨拶                                                    |
| 14:05-15:05 | 講演:<br>「懐徳堂文庫について一印を手がかりに古文献の来歴を知る―」<br>湯浅邦弘 氏(文学研究科教授) |
| 15:05-15:15 | 質疑応答                                                    |
| 15:15-15:45 | 休憩                                                      |
| 15:45-16:45 | 講演:<br>「石濱文庫の特色と今後の調査・研究にむけて」<br>堤 一昭 氏(文学研究科教授)        |
| 16:45-16:55 | 質疑応答                                                    |
| 16:55-17:00 | 閉会                                                      |

## 【講師紹介】

### 大阪大学 湯浅 邦弘 教授

#### 【研究分野・内容】

中国古代思想史の研究、新出土文献の研究、懷徳堂漢籍の研究

#### 【経 歴】

大阪大学大学院文学研究科修了 文学博士

北海道教育大学講師、島根大学助教授、大阪大学助教授を経て、  
2000 年 4 月から大阪大学文学研究科教授。

2009 年から、大阪大学文学研究科懷徳堂研究センター長(兼務)。

大阪大学附属図書館研究開発室員(懷徳堂資料などの保存、公開、電子化、データベース化)

#### 【著 書】

『懷徳堂事典』、『墨の道 印の宇宙 ―懷徳堂の美と学問―』

『懷徳堂の歴史を読む』(以上、大阪大学出版会)

『論語』『菜根譚』『諸子百家』(以上、中公新書)

『孫子・三十六計』『菜根譚』(角川ソフィア文庫)、

『入門 老莊思想』(ちくま新書)ほか多数。

#### 【テレビ出演】

NHK100 分 de 名著「孫子」(2014 年 3 月)、同「菜根譚」(11 月)。(http://www.nhk.or.jp/meicho/)

### 大阪大学 堤 一昭 教授

#### 【研究分野・内容】

東洋史学、モンゴル時代(13~14 世紀)の中国史

「東洋学学術資産としての石濱文庫の基礎的研究」(科研費 2014~2016 年度)の研究代表者

#### 【経 歴】

京都大学大学院文学研究科修了 文学修士

大阪外国語大学比較文化講座専任講師、同助教授、同准教授を経て、2007 年 10 月より  
大阪大学文学研究科准教授、2013 年 6 月から教授(共生文明論講座)。

大阪大学附属図書館研究開発室員(石濱文庫資料などの保存、公開、電子化、データベース化)

#### 【著 書】

『グローバルヒストリーと帝国』『歴史学のフロンティア』(以上共著、大阪大学出版会)

『交錯する知 衣装・信仰・女性』(共著、思文閣出版)

『中華民国の制度変容と東アジア地域秩序』(共著、汲古書院)

『石濱文庫の学際的研究』『東洋学者・石濱純太郎をめぐる学術ネットワークの研究』

(編著、文学研究科共同研究報告書)

## 懷徳堂文庫について

— 印を手がかりに古文献の来歴を知る —

平成 26 年度 大阪大学職員研修

2014 年 12 月 10 日 (水)

大阪大学文学研究科 湯浅邦弘

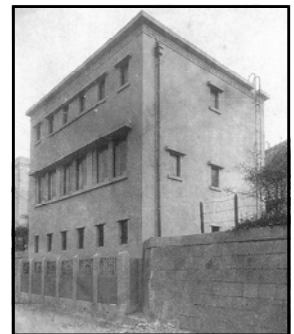
### 【江戸時代の懷徳堂】

- 享保 9 (1724) 懷徳堂、開学。初代学主三宅石庵。  
享保 11 (1726) 懷徳堂、官許。「大坂学問所」に。  
中井竹山・履軒、山片蟠桃ら活躍。  
明治 2 (1869) 懷徳堂、閉校。



### 【重建懷徳堂】

- 明治 43 (1910) 懷徳堂記念会、設立。  
明治 44 (1911) 大阪市立美術館において懷徳堂先賢遺書遺物展覧開催。懷徳堂師儒公祭  
挙行される。西村天囚『懷徳堂考』刊行。懷徳堂記念会から『懷徳堂五  
種』『懷徳堂印存』など刊行される。  
大正 2 (1913) 懷徳堂記念会、財団法人として認可される。  
大正 5 (1916) 大阪市東区豊後町十九番地に重建懷徳堂竣工。松山直蔵を教授として招  
聘。  
大正 11 (1922) 孔子没後 2400 年記念事業とし  
て、孔子祭を挙げる。  
大正 13 (1924) 『懷徳』を創刊。  
大正 14 (1925) 『懷徳堂文科学術講演集』『懷  
徳堂百科通俗講演集第一輯』刊  
行。西村天囚旧蔵書、「碩園記  
念文庫」として懷徳堂に寄贈さ  
れる。  
大正 15 (1926) 懷徳堂創学 200 年、重建懷徳堂  
10 周年記念として懷徳堂書庫ならびに研究室竣  
工。『懷徳堂要覧』刊行。  
昭和 6 (1931) 中井木菟麻呂「旧懷徳堂平面図」作成。  
昭和 7 (1932) 中井木菟麻呂、中井家伝来の懷徳堂関係資料を  
懷徳堂記念会に寄贈。「天生寄進」。  
昭和 11 (1936) 中国の清華大学教授劉文典来堂、碩園記念文庫  
の調査研究を行う。  
昭和 14 (1939) 中井木菟麻呂、昭和 7 年に続き、中井家伝来資



- 料を懷徳堂記念会に寄贈。伊藤介夫遺族より、旧懷徳堂図書寄贈される。
- 昭和 17 (1942) 重建懷徳堂 25 周年記念事業として中井竹山『草茅危言』を刊行。
- 昭和 20.3 重建懷徳堂、大阪大空襲により、書庫棟を残して焼失。

【懷徳堂記念会から大阪大学へ】

- 昭和 24.12.26 懷徳堂記念会、戦災を免れた重建懷徳堂蔵書 3 万 6 千点を一括して大阪大学に寄贈。「懷徳堂文庫」と命名され、受入先となった文学部が整理にあたる。(この当時、図書館本館はまだ建設されておらず、各部局に文学部分室、法学部分室のように分室が設けられていた。なお、分室は後に分館と改称された。)
- 昭和 25 吉田鋭雄(重建懷徳堂最後の教授、1879～1949)旧蔵漢籍約 4400 冊を「北山文庫」として受贈。
- 昭和 31.3 懷徳堂文庫、文学部から附属図書館に管理換となる。但し、資料そのものは、文学部分館、文学部中国哲学研究室などに分散収蔵されたままであった。
- 昭和 35.4 附属図書館本館(豊中地区)第一期工事完成。懷徳堂文庫、一部が図書館に移転。
- 昭和 41.3 附属図書館本館第二期工事(書庫棟 2 層の増築)完成。同年、懷徳堂文庫、一括して書庫棟第 2 層に収蔵される。但し、一部はなお文学部内に。
- 昭和 45 『懷徳堂文庫図書目録』編纂のための総合調査始まる。これに併せて、文学部内に残されていた資料も、順次書庫棟第 2 層に配架されていった。
- 昭和 51.3 『懷徳堂文庫図書目録』(大阪大学文学部)刊行。
- 昭和 54 新田和子(中井木菟麻呂の妹終子の養女)所蔵中井家関係資料受贈。第一次「新田文庫」。
- 昭和 56.6 附属図書館書庫棟が増築(3～6 層)され、懷徳堂文庫は第 6 層の貴重図書コーナーに移転。
- 昭和 58 「新田文庫」第二次受贈。計 1800 余点。
- 平成 9.12 附属図書館、懷徳堂資料の一部を電子化し、「電子展示」としてインターネットで公開。
- 平成 13.5 大阪大学創立七十周年記念事業で、懷徳堂貴重資料のデータベースおよび懷徳堂 C G 公開。
- 平成 13.8 懷徳堂文庫、図書館新館(平成 12.3.28 竣工)6 階貴重図書室に移転。
- 平成 13.12 『懷徳堂事典』(大阪大学出版会)刊行。
- 平成 14.4 「W E B 懷徳堂 <http://kaitokudo.jp/>」公開。
- 平成 17 貴重資料(懷徳堂幅、中井竹山肖像画など)の修復が行われる。
- 平成 18 「W E B 懷徳堂」で「懷徳堂印章展示」公開。
- 平成 21 貴重資料(入徳門聯、帰馬放牛図など約 30 点)の修復が行われる。
- 平成 22 懷徳堂記念会創立 100 周年。懷徳堂展(大阪歴史博物館、2010.10.27～12.20)開催。
- 平成 28 重建懷徳堂竣工 100 周年。

## 石濱文庫の特色と今後の調査・研究に向けて

※「石浜」「石濱」は、本来の表記「石濱」に統一した。

堤 一昭 (大阪大学文学研究科・共生文明論[専門:東洋史学])

平成 26 年 12 月 10 日(水) 大阪大学総合図書館・図書館ホール

テーマ「図書館と貴重コレクション」(平成 26 年度 大阪大学職員研修)

### ◆配布・回覧資料 (このレジュメ(6p.)以外で)

- ① 『大阪大学図書館報』43-3 (2010.3) 【特集】東洋学資料の宝庫～石濱文庫を知っていますか？ (<http://www.library.osaka-u.ac.jp/publish/kanpou/170.pdf>) 2 枚
  - a. 懷徳堂文庫に続く大阪の東洋学コレクションー石濱文庫の再調査にむけて(堤)
  - p.1-、b. 石濱文庫記念講演会(2009.11.12) p.3-、c. 石濱文庫資料紹介 p.6-
- ② 藤枝晃「町人学者・石濱純太郎」:『図書』(岩波書店)234号(1969年2月)→**原資料回覧**
- ③ 「石濱純太郎先生年譜略」、外山軍治「石濱文庫について」:『大阪外国語大学所蔵石濱文庫目録』1979年版から。 2 枚
- ④ 展示資料解説(石濱文庫) 1 枚

## 1. 石濱純太郎(いしはま・じゅんたろう,1888-1968)とその研究

漢学から東洋学へ進んだ第一世代、那珂通世(なか・みちよ,1851-1908)、内藤湖南(ないとう・こなん/虎次郎,1866-1934)らに続く**第二世代**の研究者。当時最先端の分野である**西夏語・ウイグル語文献研究、敦煌学**などの“草分け”の一人で、成果は彼の影響を受けた次の世代に開花した(西田龍雄の西夏文字解読、藤枝晃の敦煌学、大庭脩の江戸期漢籍輸入・受容の研究など)。くわしい年譜・著作目録は『石濱先生古稀記念東洋学論叢』1958年[阪大外図002/10]、横田健一・大庭脩(関西大学の同僚)、藤澤かつ(姉)による伝記・回想は『泊園書院歴史資料集』2010年[阪大総図372.105/AZU]所収。

◆配布資料① a.「懷徳堂文庫に続く大阪の東洋学コレクションー石濱文庫の再調査にむけて」(以下の諸資料からコンパクトにまとめたもの)に**肖像写真**が載る。 **経歴**は、配布資料③の「年譜略」参照。

◆配布資料②藤枝晃「町人学者・石濱純太郎」は、石濱と親交があり、学問の後継者でもある藤枝 晃(1911-1998)が、追悼文にこと寄せて、石濱を江戸時代以来の懷徳堂や適塾も含めた**大阪の町人学者の系譜**、大阪の学問の流れに位置づけたもの。文章自体が、内藤湖南「大阪の町人と学問」(『日本文化史研究』(下)講談社学術文庫77他所収)を“下敷き”とする。石濱へのオマージュとして意図的に倣ったと思われる。

## 2. 石濱文庫のこれまで

### (1) 受け入れから『石濱文庫目録』の刊行まで——1968～1979 年

#### ◎受け入れから購入まで

石濱と大阪外国語学校蒙古語部で同期の吉川勝太郎、および純太郎長男の作家・石濱恒夫氏と陸軍戦車第十九連隊からの友人でもあった司馬遼太郎(大阪外国語学校蒙古語部出身)らが尽力。1968 年 6 月に当時の「上八学舎」の図書館新館に搬入。保管状態バラバラ、虫食いも。ガス燻蒸と受け入れ順の「所在目録」作成作業。古書店による評価。1970 年度末に“購入”(その後も石濱家から寄贈あり)。

※“一冊残らず受け入れた”が、日記や小出櫓重からの手紙などは石濱家に残る

(→『小出櫓重の手紙—石濱純太郎宛書翰集—』大阪市史編纂所、2012 年)

#### ◎目録編纂作業

図書館職員(布川嘉佑・青山弘ら)による作業+「石濱文庫目録編纂委員会」(1970 年 4 月～)の教官らによる専門言語の知識が必要な作業。漢籍は青山が試行錯誤。ナウカがロシア語資料調査に参加。1972 年に「石濱文庫仮目録」(所在目録を分類配列・写真印刷)作成、1975 年 2 月に図書・雑誌はほぼ整理完了(それ以外の特殊言語部門・破損本マイクロ化・書簡・原稿・雑書はまだ)、冊子目録作成の段階へ。

#### ◎『大阪外国語大学所蔵 石濱文庫目録』1977 年版と 1979 年版

基本的には 1977 年版に、索引(和書・洋書は著者索引、漢籍は書名索引)と 1979 年当時の図書館長の序を増補したものが 1979 年版(※諸大学・研究室に両者が並存し、目録が置かれてしかるべき研究室にない場合もある)。ただし、双方の「写真の部」(pp.429-492)は、ページ数は同じでも掲載写真・構成が異なる。モンゴル・チベット文仏教文献、拓本(「1570cut」撮ったという microfilm から)、写真資料、モンゴル語新聞、洋書、ノート等々。1979 年版の pp.493-500 には拓本・写真・ノート等の一部分の目録。双方ともキャプションの欠如・錯誤がはなはだ多く、全く頼りにならない。おそらく当時、時間不足と調査・整理方法が不明だったため。→→図書・主な雑誌以外の資料は、整理途上・未整理のまま残された。

### (2) 「石濱文庫記念学術講演会」の時代——1979～2003 年

#### ◎箕面キャンパスへの移転(1979 年～)

石濱文庫は、当初は書庫 1 階→書庫 3 階に排架。「貴重書庫」スペースが格子状のパーテーションで囲われ、さらにその内部に来賓参観用の区画も設けられる。

#### ◎25 年・13 回にわたる「石濱文庫記念学術講演会」

目録刊行後、文庫関連の主な事業。学外(井上靖・司馬遼太郎・陳舜臣・小松左京ら)+学内の講師により年一回開催(1988 年以降は五年に一回。2003 年が最終)。毎回の講演録は刊行されていない。「特殊文庫運営委員会」(～2000 年度。委員 8 名)は講演の企画(?)。

### ◎未完の「『石濱文庫』未整理資料整備5カ年計画」

1997年度教育研究学内特別経費で未整理資料(段ボール箱約50箱)の仕分け——調査結果:対象資料7000点以上(資料5,131冊、書簡類2,000点)。ただし資料の未整理分約2,000点以上、書簡類の未整理分4,000点がこれに加わる。**合計約13,000点が未整理状態**。1999～2000年度の2年間に未整理資料の電算入力・書簡類の整理・未整理図書ラベル貼りなど(未完。計400万円?)。一部の脱酸化処置も。ただし目録補遺版作製、保存資料マイクロ化・製本、拓本類整理は計画のみ。

### (3)「国立大学法人化」前後から——2004年～

#### ◎「貴重図書問題専門委員会」(2004～2005年)

※堤はここから参加。

専門委員6名に貴重図書(再選定)基準づくりを諮問したが、3回開催のみで終わる。

#### ◎外大・阪大統合後の「石濱文庫記念講演会」(2009年)

——講演会については資料①b.参照

1979年版目録刊行から30年の節目。講演に先立ち「石濱文庫」受け入れ当時の図書館員・教官を招き座談会。当時の状況・課題・整備状況等を聞き取る。

#### ◎漢籍・洋書目録の全国データベースへの参加 ——『石濱文庫目録』データの入力

2009年度:国立情報学研究所の総合目録DB遡及登録事業により洋書3000冊遡及入力→Webcatおよび阪大OPACでの検索が可能になる。2010年度:京大人文研の「全国漢籍データベース」作成事業に参加。漢籍10,272件が検索可能になる(ただし「新学部」「國書」は除く)。

#### ◎大阪大学附属図書館「研究開発室」への課題追加 ——2011年度から

※堤が石濱文庫等担当。

#### ◎石濱文庫はじめ外国学図書館貴重書の総合図書館貴重書庫への移動 ——2014年度

## 3. 石濱文庫の特色 一大規模・多言語。研究者に調べてもらうことで価値発見。

【】内は本日の展示資料。

◆配布資料②外山軍治(図書館長・東洋史学)「石濱文庫について」の下線部、および④展示資料解説参照。

(1)目録に載る資料 (≡“既整理”資料。4万点以上:「漢籍20,262冊,和書9,021冊,洋書3,269冊,雑誌9,743冊」 ※石濱の“雑学”を反映して、ごくふつうの本も含む。

a.「まず第一に、西夏語、モンゴル語文献などに稀覯書というべきものが含まれている。」

【西夏語『番漢合時掌中珠』石印本1924年、モンゴル語『元朝秘史』景鈔本】

b. 漢籍「博士が私淑していた羅振玉・王国維をはじめ、中国近代諸学者の業績が…網羅されている。」【羅振玉『殷墟書契前編』・王国維『觀堂集林』】

※「石印主義」でいわゆる“善本”(宋元版など)はほとんどない。和刻本漢籍約150点。

c. **洋書**「スタイン・ペリオ・ヘディンら、二十世紀初頭に行われた中央アジア学術探検隊の報告書の類は遺漏なく集められている。」【A. Stein, *Thousand Buddhas*, 1921】

※ロシアの東洋学文献も多い。

d. **和書**「博士が強い関心を寄せていた近世大阪の文化史関係の文献が多い…質量ともに他の追随を許さない」

【富永仲基『出定後語』、木村兼葭堂『一角纂考』、山片蟠桃『夢之代』】

※石濱文庫目録では、近世近代の日本人が漢文で書いた書籍を**漢籍 G「國書」**に収録。注目すべき。

e. 「欧米の東洋学者から数多くの論文抜刷を寄贈せられている」

※目録未収の抜刷(陳寅恪など中国の著名な学者から)もあり、既収も含め、所在確認と再整理必要。

## (2)整理途上・未整理の資料 (≒≒目録に分類記載されていない資料。13,000 点以上)

a. 「**モンゴル語・満洲語・ウイグル語・チベット語に関する資料**が数多く収められている。」→モンゴル語・チベット語仏典。清朝期の満洲語・チベット語、満洲語・漢語のバイリンガル文献等々。

b. 「いわゆる俗書(“ゲテもの”)といって、当時の京大などでは購入をはばかる種類の書物には、とくに目をかけて集めている」【A. Баранов, *Барга*, 1912.】配布資料①b.参照

c. 拓本(約 1300 枚)：中国龍門石窟の造像記が 3 分の 2。書道史上の名品をはじめ、学術的価値の高いものも。種類別の整理まで済。全体の目録はこれから。概要紹介、隋唐時代墓誌銘・モンゴル時代石刻の目録あり(堤)。「龍門四品」の一つ「魏靈藏薛法紹造像記」の原拓】

d. 写真：アルバム「石濱文庫写真集」1～23 巻に貼られたもののほか、未整理多数。

e. 書簡：日本民俗学・西夏学のニコライ・ネフスキー関係書簡(生田美智子『資料が語るネフスキー』；加藤九祚『完本 天の蛇』；H.24 文研共同研究報告書)、石田幹之助関係(岡崎精郎の論文あり)。一部のハガキは差出人別に整理済。他は 1999～2000 年頃の整理が中断。保管方法含めて要再検討。

f. **20 世紀前半の日本とアジアとの関係資料**：【『Köke tuy』(フフトグ/青旗)】→次の「4. 今後の調査・研究に向けて」参照。当該期の日本と東北アジア、東南アジアの関係の多言語資料あり。これまでほとんど手つかずながら、今後注目されるべき資料群。多言語/多分野にわたる専門家の協力が必要。

g. その他：研究ノート・メモ・原稿類。石濱家家政資料ほか。一見ゴミのように見えるものも要注意。



## 4. 今後の調査・研究に向けて

——石濱文庫の“貴重”さは、研究に「利用されてこそその価値」

◆「本学が石濱文庫をどのように活用するかは、学界注視のまとなっている。宝の持ち腐れだなどといわれたいようにしたいものである。」(外山軍治「石濱文庫について」)

◆排架の問題：集密書架・木製書架・段ボール箱に分散して置かれていた。

→旧排架をそのまま移した現状。旧排架見取り図・目録などと対照の上、要再排架。

◆保管方法・利用環境の問題：外的環境は改善。種別毎に要対策。

\*\*\*\*\*

## ■「東洋学学術資産としての石濱文庫の基礎的研究」

(科研基盤(C),H.26～28.代表:堤, 3,400 千円)

【背景・準備】：1. 大阪外大の貴重図書問題専門委員の時期から——拓本整理、貴重書庫見取り図など概況把握。2. 大阪大学文学研究科共同研究(文学研究科ほか 10 名)——報告書 H. 23『石濱文庫の学際的研究—大阪の漢学から世界の東洋学へ—』、H. 24『東洋学者・石濱純太郎をめぐる学術ネットワークの研究』

【研究目的】：1. 石濱文庫の未整理資料(拓本、資料写真その他)、くわえて既整理の図書・雑誌中からも、現在の研究状況から見て学術的価値の高い資料群について調査し、全容の目録作成とその中の貴重資料のデジタルアーカイブ化にむけての整備をおこなう。2. 「(仮) 石濱文庫の総合的研究」の検討・企画。3. 大阪大学総合学術博物館での展覧会「(仮) 大阪の漢学から世界の東洋学へ—石濱純太郎コレクションから見る人と学問」の企画。

※所蔵資料を利用した先端的な研究を活性化させる。

【研究計画・方法】 ←※採択年度が石濱文庫移転と重なったため、主な作業は H.27～に集中。

◎平成 26 年度～27 年度：(1)「石濱文庫」の未整理資料、既整理の図書・雑誌からの学術的価値の高い資料群の選定。各資料群(①拓本, ②写真・ノート他, ③重要・稀覯図書、雑誌・新聞)の調査・整理。撮影と目録データ入力開始。(2)(3)「石濱文庫」の総合的研究、および大阪大学総合学術博物館での展覧会企画の検討開始。◎28 年度：(1)「石濱文庫」の学術的価値の高い資料群の目録編集・作成。撮影データのデジタルアーカイブ化に向けての大阪大学図書館担当部署との協議、アップロードへの準備。(2)(3)企画の取りまとめ。

【平成 26 年度の事業】

◆「[資料紹介]石濱文庫所蔵 隋唐時代墓誌拓本目録」(『待兼山論叢』48 号, 2014 年)

※ほか、不十分ながら、龍門石窟の現状撮影も行う(観光地化と文化財の劣化あり)。

◆研究セミナー「戦前期モンゴル語新聞『フフ・トグ(青旗)』のデジタル化と公開の可能性」[公開] 2014 年 12 月 20 日(土) 13:00-17:00。大阪大学豊中キャンパス, 豊中総合学館 4 階 L5 教室(参照:「大阪大学中国文化フォーラム」(法研・田中仁教授ほか)のサイト <http://www.law.osaka-u.ac.jp/c-forum/> )

主催：NIHU 現代中国研究・東洋文庫拠点（政治史資料研究班）；共催：21 世紀課題群と中国（大阪大学未来研究イニシアティブ）／堤科研（東洋学学術資産としての石濱文庫の基礎的研究）

【主旨】本学の貴重資料である石濱文庫は、1940 年代に満洲国で発行されたモンゴル語新聞『フフ・トグ(青旗)』を世界で唯一、ほぼ完全な形で所蔵している。当時の文化・民族政策とメディアの関係のみならず、現在にいたる民族意識を知りうるものとして国際的に注目されている。資料の保存とデジタル化による公開・学術利用にむけて、中国の内モンゴル大学モンゴル学院、東洋文庫などとの連携、学術ネットワーク構築の可能性をさぐる。【パネラー】堤一昭(大阪大学)、周太平(中国・内モンゴル大学／大阪大学)、吉田豊子(京都産業大学)、内田孝(滋賀県立大学)、相原佳之(東洋文庫)

◆法研・田中仁教授ほかと連携し、上記の「21 世紀課題群と中国」の一つとして東アジア地域研究に関わる一つの多言語の複合的学術資産活用モデルを導き出す研究計画あり。

- ・ 石濱文庫を前近代から近現代にいたる多言語の複合的学術資産として位置づける。
- ・ 歴史学・図書館学・博物館学から諸言語(外国語学)や知的財産権をめぐる法制度と法曹実務などから総合的にアプローチする。
- ・ 石濱文庫の多言語の雑誌・書簡の整理を行い、そのデータベース化・デジタル化と公開の可能性を明らかにする。

※ex.石濱文庫未整理資料に、日本占領期のフィリピンにおける日本語教科書などあり。阪大内外の、多岐にわたる外国語研究・教育の人材との連携協力を必要とする。

\*\*\*\*\*

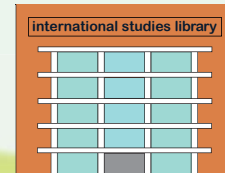
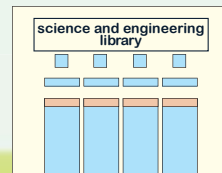
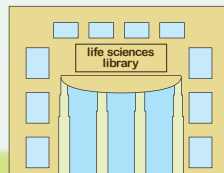
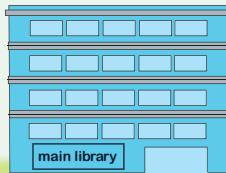
◆**大阪大学の懷徳堂文庫、関西大学の内藤文庫、泊園文庫の研究との連携は不可欠。**

※大阪の漢学から東洋学への発展をたどり得る代表的なコレクションを両大学で二分。

- ・ 石濱は懷徳堂文庫の事業運営委員の一人(1950 年)。先行する懷徳堂文庫研究に学ぶ必要。
- ・ 石濱が運営にも尽力した泊園書院の資料(泊園文庫)は、石濱文庫の研究にも不可欠(ex.『泊園』の所蔵ほか)。石濱文庫に泊園書院関係資料の所蔵もあり。今後も研究交流が不可欠。
- ・ 内藤文庫(内藤湖南と長男の内藤乾吉の蔵書)の研究(書簡類など)は、石濱文庫の書簡資料研究の参考になる。

◆国文学研究資料館「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」(阪大も参加)にどう関わるか。約 550 点(日本人が漢文で書いた書籍を含む)が相当する。

※外国学図書館・旧分類（大阪外国語学校、附設の第五臨時教員養成所）にも対象資料。



March 2010

# 大阪大学図書館報

vol. 43 no. 3 通巻 170号

発行所 大阪大学附属図書館 2010年3月1日発行

〒560-0043 豊中市待兼山町1の4

e-mail: kohowg@library.osaka-u.ac.jp



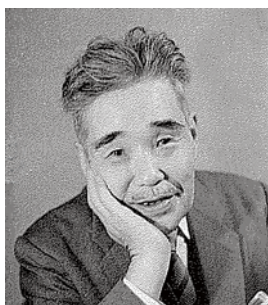
## 【特集】東洋学資料の宝庫～石濱文庫を知っていますか？

- 懐徳堂文庫に続く大阪の東洋学コレクション  
——石濱文庫の再調査にむけて …P. 1
- 石濱文庫記念講演会 …P. 3
- 石濱文庫資料紹介 …P. 6
- ◆ 教員著作寄贈図書のご紹介 …P. 7
- ◆ News 図書館からのお知らせ …P. 7

## 【特集】東洋学資料の宝庫～石濱文庫を知っていますか？

懐徳堂文庫に続く大阪の東洋学コレクション  
——石濱文庫の再調査にむけて

堤 一昭



石濱純太郎肖像

関西大学東西学術研究所編  
『大阪の学問』より

石濱文庫とは、石濱純太郎（1888-1968）の旧蔵書を中心とした東洋学コレクションで、大阪大学外国語学部に所蔵されている。4万冊以上にのぼる図書・雑誌に加えて、昨秋の記念講演会で紹介した拓本、さらに写真、研究過程を示すノートや書簡など1万点をはるかに超える資料があり、大阪大学全体でも懐徳堂文庫と並んで最大規模の特殊文庫である。

石濱純太郎は、明治21年（1888）に大阪の製薬会社の家に生まれ、小学校入学以前から漢学塾・泊園書院で藤澤南岳の教えを受けた。姉が南岳の次男、藤澤黄坡に嫁したこともあり、泊園書院との縁は終生続くことになる。市岡中学を経て検定で東大に入学し中国文学を学んだが、漢学のみにとどまらず新たな学問をめざした。まず京都の東洋学者たち、特に内藤湖南に師事し、開拓されつつあった甲骨文字・敦煌文献の研究に触れた。さらに大正11年（1922）に、創設当初の大阪外国語学校（阪大外国語学部の前身）に選科生として入学してモンゴル語を学んだ。この学校の教員であった浅井恵倫やニコライ・ネフスキーらと東洋学の研究グループ「静安学社」を昭和2年（1927）に結成し、重建懐徳堂を活動の場とした。ネフスキーとともに西夏文字の解読に取り組み、ウイグル

語文献の研究にも手を伸ばした。東洋言語学・歴史学へと学問の幅を拡げて、当時の東洋学の最先端分野の研究に携わったのである。国内外の研究者と交流して、資料収集は同時代のモンゴル、シベリア地域の動向に関わるものにまで及んでいった。

大阪の町人学者と自他共に任じた。大阪住吉の家は学問サロンの観があり、知識や資料を惜しみなく提供して研究を促したという。泊園書院のほか、大阪高等学校（阪大の前身校の一つ）・大阪外国語学校／大学・関西大学・龍谷大学・京都大学・天理大学に出講し、戦後は関大教授を務めた。昭和43年（1968）の没後、全蔵書・資料は遺族から大阪外国語大学に寄贈・購入され、十年の整理・編纂作業を経て『石濱文庫目録』が昭和54年（1979）に刊行された。なお、石濱が運営にも尽力した泊園書院の蔵書は、義兄の藤澤黄坡と石濱が教授であった縁で泊園文庫として関西大学に入り、石濱の師の内藤湖南の蔵書も、長男の内藤乾吉が教授を務めた縁で関西大学の蔵となっている（一部は杏雨書屋、京大人文科学研究所、大阪市立大学所蔵）。

大阪大学の懷徳堂文庫が、江戸時代の懷徳堂から大正・昭和時代の重建懷徳堂まで、大阪の漢学をはじめとする学問を知り得る貴重な資料として、現在も新たな研究・保存・公開がなされていることは周知のことである。石濱文庫はまさにこれに続くものとして、より注目されるべきである。石濱と縁のある泊園文庫と内藤文庫が関大に蔵され、平成19年（2007）の阪大と外大との統合により懷徳堂文庫と石濱文庫が阪大に蔵されたことで、大阪の漢学から東洋学への発展をたどり得る代表的なコレクションが奇しくも両大学で二分されることになったといえる。ちなみに内藤湖南は京都学派のイメージが強いが、教授就任以前、大阪朝日新聞の論説記者を務め、富永仲基・山片蟠桃ら懷徳堂の先学の事蹟を顕彰し、重建懷徳堂にも出講するなど、実は大阪とその学問との縁が深いのである。

石濱純太郎が資力を注ぎ、研究者たちとの交流を活かして収集した膨大な図書・資料には、現在では入手し得ないもの、劣化が心配されるもの、また現在の研究状況の中でこそ活かすというものも数多い。だから、貴重だとして囲い込んで、遺志に背くことになりかねない。今後、単なる先学の回顧・顕彰にとどまらず、研究・保存・公開を見すえた再調査を行い、石濱の志を継いで新たな視点からの東洋学を大阪大学から興していくことが我々の責務といえないだろうか。拓本については、来年度に阪大総合学術博物館での展示をめざしている。関係の皆様のご教示、ご協力、ご支援をお願いしたい。

（つつみ・かずあき 文学研究科准教授）

**藤澤南岳（ふじさわ・なんがく 1842-1920）** 幕末・明治期の儒学者。明治維新の際は高松藩のために奔走。明治になって大阪の泊園書院を父の東咳から継承し、数千の門人を教育。「通天閣」は南岳の命名による。

**内藤湖南（ないとう・こなん 1866-1934）** 東洋学の京都学派の創始者の一人。京都帝大教授。中国史の時代区分をはじめ中国史、日本文化史に多くの業績を残す。全集がある。

**浅井恵倫（あさい・えりん 1895-1969）** 言語学者。東南アジアの言語の研究を行う。1924年大阪外国語学校馬來語部（後のインドネシア語学科）講師、次いで教授。後、台北帝大助教授、金沢大、南山大教授となった。

**ニコライ・ネフスキー（Nikolai Aleksandrovich Nevskii 1892-1937）** 日本学者、西夏（中国西域）学者。大阪外国語学校でロシア語教師として勤務するかたわら、日本各地を調査し、日本民俗に関する論文を発表。ソビエト連邦に帰国後も大学で日本研究、西夏語研究を行ったが、1937年スパイ容疑で逮捕、殺された。

**重建懷徳堂** 懷徳堂は1869年に閉校したが、西村天因らの尽力により、1916年に再建された。専門家の講演などが行われ、市民大学の観を成した。1949年、蔵書が大阪大学へ移管された。

# 石濱文庫記念講演会

石濱文庫記念講演会は、外国学図書館が「大阪外国語大学附属図書館」であった時代に13回にわたり開催されました。

平成21年(2009)は『石濱文庫目録』作成から30年の節目であり、また洋書3,000冊の目録データベース入力が国立情報学研究所の「次世代学術コンテンツ基盤共同構築事業」に採用され、年度内に作業完了する見込みです。

この節目の年を記念して、箕面市立図書館の後援で、11月12日に講演会を外国学図書館AVホールで開催しました。学外の方も含め120名の方が聴講しました。

一橋大学の田中克彦名誉教授、本学文学研究科の堤一昭准教授の講演の要旨を紹介します。



コレクション全体に反映された石濱の学問への願い ― 田中克彦先生

## 講演 石濱文庫が語る世界



たなか かつひこ  
一橋大学名誉教授  
(言語学、モンゴル学)

「大阪には石濱というすごい学者がいる」と、一橋大学の上原専禄先生から聞いたのが石濱純太郎の名を聞いた最初だった。一般の人民が自分の関心に従って知識と教養を広げて行く大阪の「町人学者」の伝統の流れを汲む人だという印象を持った。

その後、大阪外国語大学に石濱純太郎の蔵書が移されたと聞いて、一度行こうと思っていた。初めて行った時がいつかは忘れたが、その時吸い寄せられたのは学術の中心から離れた紙さけのようなものだった。

それは、イディッシュ語で書かれた『ビロビジャネル シュテルン(ビロビジャンの星)』、弁当箱も包めないような粗悪なタブロイド版の新聞で、40枚ぐらいだった。

私がイディッシュ語と出会ったのは、1968年である。ハバロフスクの郵便局で出会ったイディッシュ語を話す男にドイツ語で話しかけ、ウォッカを飲んで意気投合し、もらったのが「ビロビジャネル シュテルン」だった。当時のロ

シアは地方紙を国外に持ち出すことを禁じていた。そのため、ポケットにねじこんで神経を使って日本に持ち帰ったのである。

石濱文庫のものは1934, 35年ごろの日付だったと記憶しているが、何故イディッシュ語の新聞を石濱純太郎が後生大事に持っていたのだろう。

日本が満洲国を作った時に、満洲国に接するアムール川流域に住んでいた朝鮮人がロシアからスパイ扱いをされて、中央アジアに強制移住させられた。そしてそこにユダヤ人が連れて来られて「ビロビジャンユダヤ人自治州」が生まれたのが1934年だったのである。それに関係するかもしれない。とにかく、西夏語や契丹語の解読に関心がある人がそういう広い世界を自分の中に作っているということにびっくりした。

(次ページに続く)

上原専禄(うえはら・せんろく 1899-1975) 歴史学者。ヨーロッパ中世史学。東京商科大学(現一橋大学)学長を歴任。

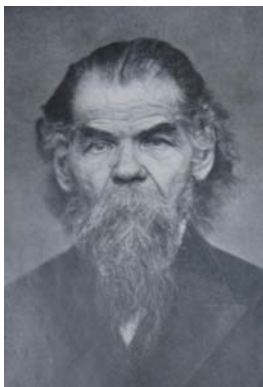
イディッシュ語(Yiddish) ドイツ語を基層とし、ヘブライ語・スラブ語などが混じり合って出来た融合語。文字はヘブライ文字を使用する。現在はイスラエル・南北アメリカ・旧ソ連で使われる。使用者は300~400万人と推定される。

ビロビジャネル シュテルン(der birobidzhaner shtern) 1930年代にビロビジャンユダヤ人自治州で創刊。現在はロシア語版とイディッシュ語版が出ている。

西夏語・契丹語 10~13世紀に東アジアに作られた国で使用された言語(p. 5注記参照)。



また、石濱文庫には『自由シベリア』という雑誌もある。これはシベリア独立運動党がプラハに亡命した際に出した政治学術雑誌である。表紙はシベリア独立のシンボルマークが書いてある。中を開くとポターニンという人の写真が出ている。



ポターニン  
「自由シベリア」  
1巻所収

ポターニンは『西北モンゴル誌』を著すなど民族学者として有名であるが、実はシベリア独立運動に関わった人間である。シベリアはシベリアの倫理を持って独立すべきという信念の下、1865年にシベリア独立運動のグループを立ち上げた。そしてその罪を問われて5年間の流刑に処せられた。

ポターニンはその後、モンゴルやシベリアの研究をしたが、これはシベリア土着の人びとの生活権利を守る運動と ethnography (民族誌) の研究が密接に結びついていたものである。そもそも学問というのは、強力な生活の要求や政治的背景に基づいて進んできたということを示すいい例だと思う。こういう本が入っているということが実に不思議なことだ。

石濱文庫にある1つ1つの文献の評価もさることながら、石濱純太郎がどんな願いを持って自分の蔵書を形成したかが重要だと思う。



「自由シベリア」表紙

石濱純太郎は大学の外にしながら、研究者に刺激を与えるような文献を集めた。どこに関心の糸が伸びていくかわからないような広がりを持っていたことが、蔵書を通じて感じられる。この本が役に立つとか俗書であるといったことではなく、コレクション全体に石濱純太郎という一人の生涯をかけた学問への願いとか憧れが反映されている。学問が細分化され、本来の精神をなくしている現在、そういう時代がかつてあったということを石濱文庫を通じて知ってほしい。

私は、著書『ノモンハン戦争』(岩波新書, 2009)で『バルガ』という資料を紹介した。今までは決まりきった資料のみを使っていたが、石濱文庫の宣伝をしたかった。石濱文庫の価値を知らなければ、日本の学問は薄っぺらいものになってしまう。また、この資料は『石濱文庫目録』にも載っていない。見かけはパンフレットみたいなもので、目録編成時に漏れてしまったのだろう。これを機会に復刻して世界の研究機関に配れば、石濱文庫が世に知られるきっかけになるかもしれない。



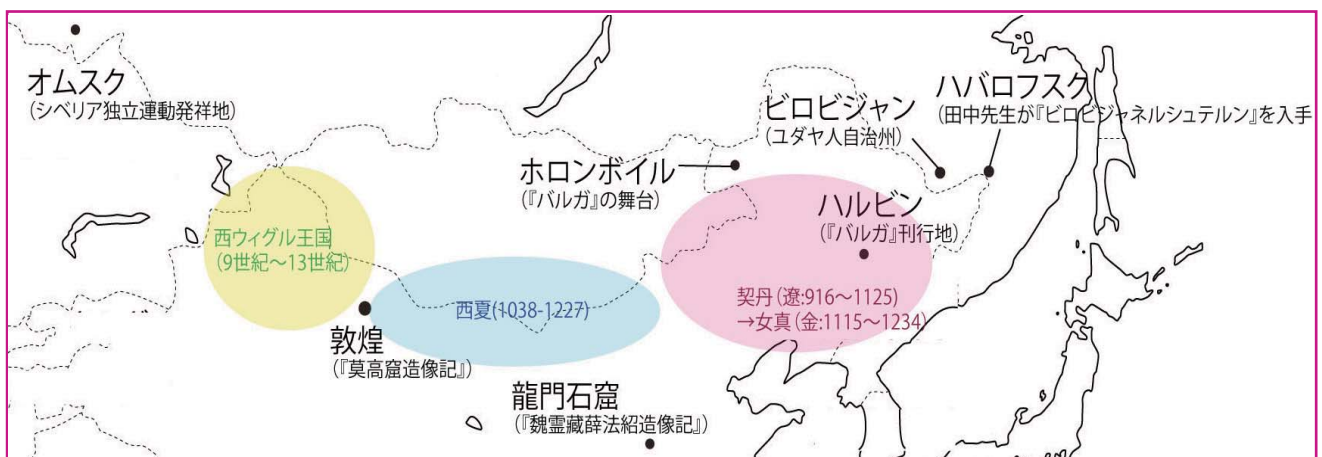
「バルガ」表紙

自由シベリア (Вольная Сибирь) 1926-28年刊行 全4巻のうち、石濱文庫には1, 3, 4巻がある。

ポターニン (Grigori Nikolaevich Potanin 1835-1920) 探検家 民族学者 西シベリアのオムスクでシベリア独立運動を起こす。「最初のシベリア市民」という称号を贈られる。

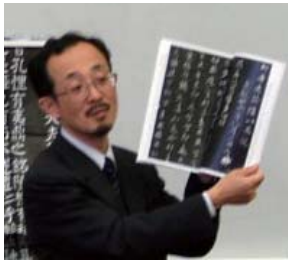
バルガ (Балга) А・バラノフ著 1912年ハルビンでロシア国境警備隊により刊行 ホロンボイルに住むバルガ族について書かれたもの。バルガ族はモンゴル諸族の中でも特に独立の気風が強く、辛亥革命時代のモンゴル諸族独立運動の中でも指導的な立場を果たした。

石濱文庫記念講演要旨 (p3-5), 資料紹介 (p. 6) 関連地図



場所はおおよその位置です。

講演 石濱文庫の拓本コレクション ―漢学から東洋学へ―



つつみ かずあき  
大阪大学文学研究科准教授

石濱文庫は東洋学図書のコレクションとして紹介されるが、拓本、その他に写真、研究過程を示すノート、書簡などの研究資料も多数含まれる。

中国や日本ほかの漢字文化圏では、拓本は書道の鑑賞・研究、また歴史研究のための資料としての2つの性格を持っている。特にもとの石碑などから採った拓本は「原拓（げんたく）」と呼ばれ、おみやげやお手本などの複製品とは区別されて、それ自体が一つの文化財である。青銅器や石碑などの石刻から歴史を研究する学問は、「金石学」という。現在は、原石、拓本、原石の写真、拓本の写真の四者を併用して研究するのが常である。交通手段が発展して、現地に行けるようになって、拓本は資料として重要である。もともとの石を見ても見えないが、拓本にとると字が見えるという不思議なことがある。拓本というものは特有の価値があると思ってほしい。

私は2004年から拓本の予備的な調査を開始した。拓本にはそれが何かを示すラベルはついていない。だから、石濱先生に一点一点これは何なのかとテストをされているような気持ちになった。とはいえ、『石濱文庫目録』編纂時の1970年代に比べ、現在は目録・図録が洪水のようにあるし、画像データベースが公開されるなど、調査・研究環境が劇的に変化している。おおよそどんなものがどれだけあるのか把握することができたが、本格的な調査・研究はこれからである。展示までを見越して、複数の専門分野の研究者との共同作業が必要となる。次のスタートラインに立っているような段階である。

石濱文庫の拓本は約1300枚あり、そのほとんどが石刻からの「原拓」である。一個人のコレクションであるため、他に比べ規模はそれほど大きくないが、これだけのものを収集することは今となっては不可能である。文化財なので中国政府は「原拓」をまず国外に持ち出させてくれないし、もとの石が失われている場合もあるからである。

石濱先生が実際に現地に出向いて入手したものではなく、幅広い交友関係から入手・購入して蓄積されていったものと考えられる。龍門石窟の造像記が三分の二をしめるが、このほかにも多様なものがある。

これからは調査・研究に加えてよりよい保管・公開が求められる。「石刻学」とでも言うべき学問を大阪大学で継承・発展させていくために利用することが必要である。

―以降、11種類に大別された拓本コレクションの説明があったが、ここでは2点のみ紹介する。詳細は堤一昭「石濱文庫拓本資料調査の概要-2006年度前半まで-」『大阪外国語大学論集』35 参照



○造像記(861枚)

石濱文庫のものは、ほぼ全て中国河南省洛陽南郊の龍門石窟のもの。5世紀末(北魏～唐時代)。壁面に浮き彫りにされた仏像のかたわらに、その由来・祈願者などを刻んだもの。

【魏靈藏薛法紹造像記】(ぎれいざう せつほうしょう ざうざうき)  
書道の世界で最高傑作と名高い「龍門四品」の一つ。古陽洞の北壁上段の釈迦像の右側に刻された碑の形をした銘文で、魏靈藏と薛法紹の二人が国運と一門の反映、成仏を祈願したものである。

○非漢字刻文のものを含む石刻群

18世紀末から東洋学の世界では、未解読文字の解読が競われていた。石濱もニコライ・ネフスキーとともに西夏文字の解読を志した。内訳は契丹5枚、西夏3枚、女真8枚、モンゴル24枚、満洲9枚。

\*契丹、女真、西夏文字は10～13世紀に東アジアに作られた国(p. 4地図参照)で利用された言葉。漢字に似ている。西夏文字は石濱と親交を結んだ西田龍雄(1928-)が後にほぼ解読。契丹文字と女真文字は完全には解読されていない。



契丹文字が鋳出された鏡



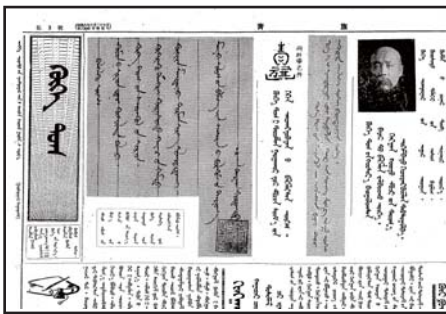
# 石濱文庫資料紹介

石濱文庫の一番の特徴は、モンゴル語・満洲語・西夏語等に関する資料が多く収められていることです。この中には非常に貴重なものが含まれています。文庫の半分は2万冊にのぼる漢籍（金石学・音韻学などが特に充実）ですが、「大正8年から昭和13年頃までの間に丸善書店を通じて輸入された東洋学関係のものは、ほとんど買った」と噂のある洋書、欧米の東洋学者から寄贈された論文抜刷、石濱が強い関心を寄せていた近世大阪の文化史関係資料などにも興味深いものが多くみられます。

## 【莫高窟（ばっこうくつ）造像記 拓本】 モンゴル（元）時代・至正八年

敦煌の郊外に、莫高窟と呼ばれる石窟群があり、4世紀から14世紀にわたる仏像と壁画、多言語にわたる「敦煌文献」により知られている。モンゴル時代、チンギス・カンの第二子チャガタイの子孫の一系統がこの地を根拠地としていた。本品は、その第二代西寧王スレイマンが莫高窟の一窟を改修した際の記念碑の拓本。上部に大きく「莫高窟」と漢字で記し、その下は観音菩薩を取り囲むように、上二行はサンスクリット・チベット、そして右から漢・西夏・パспа・ウイグルと、合計六体の文字で刻まれる。

パспа文字：モンゴル（元）時代のチベット人パспа（八思巴）が、クビライ・カアン  
の命を受けて作った文字。1269年に「蒙古新字」として詔勅により公布された。



## 【青旗（せいき）】 新京（満洲国）1941-45

太平洋戦争時に満洲国で刊行されたモンゴル語の新聞。日本人によるモンゴル人への啓蒙活動の色合いが強い。文化大革命などの影響もあって、現在、中国やモンゴルで見つけることは難しい。石濱文庫のものは欠号がほとんどないため、モンゴルの研究者からも注目されている。この他モンゴル語新聞『奉天蒙文報』（1918-20）『蒙古新報』（1937-40）『児童新聞』（1939-40）なども所蔵している。

## 【Southern Tibet】 スtockホルム 1916-22年刊

ヘディン (Sven Anders Hedin:1865-1952) 著。ヘディンはスウェーデンの地理学者・探検家。中央アジア・チベット・新疆地域を調査。楼蘭遺跡の発見などでも有名。石濱文庫にはヘディンの著をはじめ、敦煌文献の調査・収集で有名な英仏のスタイン（1862-1943）、ペリオ（1878-1945）らが20世紀初頭に行った中央アジア学術探検隊の報告書の類が漏れなく集められている。

## 【街能噂（ちまたのうわさ）】 4巻1冊 大阪ほか 1835（天保6）年刊

滑稽本。撰者の平亭銀鶏（へいていぎんけい、別名畑銀雞）は江戸の人物で、大阪に数年間滞在して見聞したことについて、江戸との違いを比較して記述している。特に第4巻には挿絵があり、視覚的に両者の違いを見ることができる。



石濱文庫資料の閲覧を希望される方は、一週間前までに外国学図書館までご連絡ください。

電話：072-730-5126 E-mail: ml-cir @ library. osaka-u. ac. jp



# 石濱純太郎先生年譜略

- (1888) 明21・8 大阪市北区堂島において父豊蔵、母平山氏カヤの長男として誕生。
- (1901) 明34・4 大阪府立市岡中学に入学、同校第1回入学生。
- (1908) 明41・10 東京帝国大学文科大学支那文学科に入学、岡田正之教授につく。8月の受験者40数名中、理科亀田豊治朗氏とのみ許可さる。その前に坪内逍遙につき英文学を修めんと思ひ、早稲田大学受験を企つるも時既に遅くして果さず。
- (1910) 明43・4 家督を相続す。丸石製菓合名会社社員となる。
- (1911) 明44・7 東京帝国大学卒業。卒業論文「歐陽脩研究」(漢文)。同期の国文学科卒業生に Serge Elisséeff 氏あり。
- (1915) 大4 この年、西村天囚氏の誘により大阪の文会「景社」に入り、長尾雨山、初山衣洲、武内義雄らの諸氏と相知る。
- (1916) 大5・7 宇治花屋敷において、京都の文会、「麗沢社」と「景社」との第1回連合会あり。  
内藤湖南(虎次郎)、狩野君山(直喜)、青木正児、岡崎文夫、神田喜一郎、小島祐馬、富岡謙蔵、佐賀東周、那波利貞、福井貞一、藤林広超、本田成之らの諸氏と初めて会う。  
この頃、石田幹之助氏と相識る。
- (1922) 大11・4 大阪外国語学校蒙古語部へ選科委託生として入学。
- (1923) 大13・3 同上 第二学年修了。
- 大13・7 京都帝国大学教授内藤虎次郎氏に随伴し、内藤乾吉氏と共に東洋語書籍調査のため、ヨーロッパにむけ神戸を出帆。ロンドン大英博物館、パリ国民図書館及び Paul Pelliot 氏宅等において敦煌遺文を調査す。なお、パリにて Serge Elisséeff、松本信広氏らの斡旋援助を受く。
- (1924) 大14・2 ヨーロッパより帰朝。
- (1927) 昭2・9 浅井懋倫、笹谷良造、高橋盛孝、Nicholas Nevsky の諸氏と「静安学社」を発起し、幹事となる。
- (1928) 昭17・2 「大阪言語学会」を創立。
- (1933) 昭28・11 「日本西藏学会」会長に推挙さる。
- (1934) 昭29・11 大阪の先覚を顕彰し大阪の教育の振興に貢献したる功績に対し、大阪府より「なにわ賞」を受く。
- (1937) 昭32・3 著作、支那学論攷等により関西大学より文学博士の学位を受く。
- (1968) 昭43・2 永眠。

なお、大正15年以降、関西大学、大阪高等学校、龍谷大学、京都大学、大阪外国語大学(専門学校時代を含む)、天理大学、帝塚山学院短期大学等で教鞭を執る。

# 石浜文庫について

外 山 軍 治

石浜文庫というのは、本学の所蔵に帰した故石浜純太郎博士（1888～1968）旧蔵の図書に対して、本学附属図書館がとくに名づけた称呼である。その中には、昭和45年3月博士の遺族より購入したものと、その後、遺族より寄贈をうけたものとからなっており、両者を併せて博士蔵書の全部ということになる。その冊数、内訳は次の通りである。

|     |         |     |        |
|-----|---------|-----|--------|
| 漢 籍 | 20,262冊 | 和 書 | 9,021冊 |
| 洋 書 | 3,269冊  | 雑 誌 | 9,743冊 |

博士は明治21年大阪市に生まれ、同44年東京帝国大学文科大学支那文学科を卒業後郷里に帰り、家業である製菓業を継承したが、その方にはあまり身を入れず、もっぱら学究としての道を歩んだ。元来漢学畑に育った人であるが、中国の伝統の学問にはあきたらず、新しい学問の分野の開拓を志向して、中国周辺諸地域の言語・文化に関心を示した。博士が、大正11年創立当初の大阪外国語学校（本学の前身）に聴講生として入学し、二年間モンゴル語の習得につとめたのも、その一つのあらわれである。

それと前後して、当時京都帝国大学文学部東洋史学の教授であった内藤虎次郎（湖南）博士に弟子の礼をとり、以来いわゆる京都学派に属する諸学者との交友が生じた。その頃の京都学派は、敦煌石窟より発見せられた書籍文書の研究に没頭していたが、博士もまたこの流行に投じて敦煌学一方の重鎮となった。そしてその後学問分野も、漢学から発して言語学・歴史学の世界に進入し、領域も、中国・西域・インド学にひろがり、考証の精緻なものと学識の該博なことをもって名を馳せるに至った。

博士はまた、大阪の町人学者の伝統をうけつぎ、市井の学者であることに誇りをもちつづけた。生活のために学校の教師になる必要もなかったが、またなろうとも考えなかった。博士が人々から羨望せられたのは、製菓会社の経営は他人にまかせ、余裕のある環境で学問の道一筋にゆくことができたことである。そして、書物を愛した博士は、このような好条件を利して蔵書の数をふやし、学界屈指と

いわれるほどになった。今日本学に帰している石浜文庫がすなわちこれであって、博士が半世紀以上にわたって収集した苦心の結晶というべきものである。

では石浜文庫にはどのような書物が、どのようにして収められているのか。一わたり概説してみよう。

まず第一に、西夏語、モンゴル語文献などに稀覯書というべきものが含まれているほか、博士の造詣の深い、モンゴル語・満州語・ウイグル語・チベット語等に関する資料が数多く収められている。これはこの蔵書の誇るもっとも大きな特徴であろう。

- ▶ つぎに漢書は、博士が元来漢文学を修めた人だけあって、その収集は経・史・子・集の各部門にわたって層の厚さを示している。とくに博士が私淑していた羅振玉・王国維をはじめ、中国近代諸学者の業績が、哲学・史学・語学・文学の各方面にわたって網羅されている。中でも、文字学・金石学・音韻学・目錄学等に関する文献が充実していることは心強い。博士が新しい学問の動向に敏感であったことはさきに述べたが、殷墟書契関係文献や、敦煌学関係の文献はほとんどもれなく収蔵せられている。

ところが、博士はこのような著名な蔵書家ではあるが、善本と称せられる、板本のよいものはあまり入っていないのである。これは博士の収書の方針がそうさせたのであって、石印（つまりチープエディション）主義であつめるのだということ公表していたと聞く。実は、京都には内藤博士や、博士よりも少し年少の神田喜一郎博士（現日本学士院会員）のような善本の収蔵をもって鳴る人々がいて、とうてい太刀打ちができないので、あっさりあきらめてしまったのかも知れない。しかし、石印主義で集められたことが非常に効果的であった。大学図書館としては、板本のよいものよりも、石印本であっても収集のひろい方が結構である。但し、善本の部類に入らないでも、今日入手不可能な板本が非常に多く含まれていることをつけ加えておかねばならない。

それとともに、博士は、いわゆる俗書といって、当時の京大などでは購入をはばかる種類の書物には、とくに目をかけて集めている。これは、今日になっては非常に貴いことで、石浜文庫の特徴の一つはこの点にある。

- ▶ 洋書の収蔵は実にすばらしく、歴史学・言語学の分野にわたって偉容を誇って

いる。博士は、大正8、9年頃から昭和12、3年頃までの間に、丸善を通じて輸入された東洋学関係の洋書は、ほとんどもれなく買ったという噂がある。これはほんとうにその通りであったようである。その領域も、東アジア・中央アジア・西南アジアにわたっており、ことにスタイン・ペリオ・ヘディンら、二十世紀初頭に行われた中央アジア学術探検隊の報告書の類は遺漏なく集められている。また博士がロシアの東洋学については該博な知識を有せられたことは有名だが、関係文献の収集においても他の追随を許さない。その他、単行書のほかに、欧米の東洋学者から数多くの論文抜刷を寄贈せられているが、中には全く得難い貴重なものが多い。

- ▶ 和書においては、明治、大正、昭和三代にわたる東洋学・言語学・仏教学関係文献が収められており、その収書は博士逝去の昭和43年に至るまで、断絶することなく続けられているのは敬服に値する。

そのほか、日本・中国・欧米の学術雑誌のバックナンバーの種類も多く、主要なものや、発刊の古いものはほとんどそのすべてを見出すことができるのである。

さらに看過することのできないのは、博士が強い関心をよせていた近世大阪の文化史関係の文献が多いことである。その質量ともに他の追随を許さないであろう。

またその収蔵は中国書画関係の出版物にも及んでおり、中国・日本で出版せられた複製本はほとんど全部入っていて、博士の教養のひろさをしのばせる。博士は雑学をもって自ら持しているところがあったが、いろいろな書物を蔵していて、大衆小説の類にまで及んでいる。博士の遺族は、これが父の学問の特徴なのだから、全部一括してめんどろをみてもらいたいと希望しておられる。

さてこの蔵書が本学にひきとられたのは、昭和43年上半期、金子学長、畠中館長時代であった。その年の7月、私は畠中氏の後をうけて図書館長に就任したのであるが、そのときには、すでに新館書庫の一階にあふれ出るように積みかさねられていた。以来私はこの石浜文庫ととりくむこととなったのである。博士には昭和初期、京大在学中からおちかづきを願っており、いろいろと教示を受けた関係もある。たいへんな仕事だが、やりがいのある仕事だと心得てこれに当った。まず数名のアルバイト学生の手もかりて所在目録の作製をいそいだ。この目録が

その後文部省に対して購入費の申請をする段階で大いに役立った。虫喰いのひどいものも多かったので、夏季の数日、部屋を密封してガスによる殺虫を実施したこともある。44年の初めには和書・洋書・漢書とまとめて書架に一応ならべられ、大学設置審議会委員の視察に供するに堪えるほどになっていた。

外大が大学紛争の波にまきこまれたのはその頃からのことである。次第にエスカレートして一時全学封鎖も行われ、学内のガラスというガラスの大部分がこわされ、実に惨憺たる状態となった。私はまだ購入手続きも終わっていない蔵書を損傷するようなことがあってはならないと、この事には随分頭をなやましたが、おかげで杞憂に終り、ほっとした。

紛争がおさまりかけた頃から、購入費の交付を文部省に申請しようということになった。当時代行であった牧学長の指示をうけて、私が三宅事務局長らとともに11月と12月に、文部省に赴いた。私は石浜博士の東洋学者としての名声、本学との浅からざる関係から説き始めて、その蔵書の内容がいかに豊富であるか、そして何故これが本学にとって必要であるか、というようなことを繰り返し説明した。初め、交渉はなかなか円滑に進むように見えなかったが、結局関係諸官の配慮により当方希望の特別予算が与えられることとなったのは幸いである。なお、蔵書の評価については、外語時代の蒙古語部卒業生である津田喜代獅氏らの尽力を得た。また、提出書類や目録の作製にあたっては、図書館全員の献身的な協力があつたことは、今でもさわやかな思い出になっている。

45年3月に購入がおわり、石浜文庫はいよいよ本学のものとなり、こんどは整理分類の段階に入った。館員の手によって、個々の書籍の整理が続けられた。帙のないものは帙をつくった。それでは費用がかさむので簡易なボール紙の帙で我慢するものもあった。腐蝕が進み、今のうちに写真をとっておかねばならないものはつぎつぎにとった。うら打ちすべきものはうら打ちした。それらの費用については、教授会会計委員会の配慮によって、連年、教官研究費の中から割愛をうけてまかなってきた。その仕事にあたるべき館員の手が足りないという事情もあるが、徐々にしかし適確に作業は続けられた。

また何とかして早く文庫を利用できるようにと考え、所在目録を作製するときにつくったカードを分類配列し、それを写真印刷に付して、仮り分類目録を急い



だ。また、その後、寄贈を受けたものについても、所在目録がつくられた。

一方、本格的な目録編纂をめざして、石浜文庫目録編纂委員会がつくられた。当時図書館長であった私が委員長となり、辻本春彦・荒井伸一・橋本勝・村田忠兵衛・伴康哉・勝藤猛および岡崎正孝の諸氏が委員として加わっている。分類困難な書籍の内容を検討して、しかるべき部門に入れるということは大切な仕事である。私のことはさておき、委員諸氏は、頻繁に図書館に立ち寄り、そのような作業に協力を惜しまなかった。とくにモンゴル語関係文献については、荒井・橋本両氏の努力によって、著しく進捗の度が高い。

この委員会は46年6月、私が館長をやめてからもひきつづき存在し、50年4月、私の停年退職とともに発展的解消を遂げ、教授会所属の図書委員会にバトンタッチを行った。その後、目録作成の仕事は図書館員の手によって着々と進められ、この度いよいよ待望の“大阪外国語大学所蔵石浜文庫目録”ができ上がったという。ご同慶にたえない。

なお移転に際しては、石浜文庫を収容できる十分なスペースをとり、その場で閲覧できるような設備をつくってほしい。本学が石浜文庫をどのように活用するかは、学界注視のまとなっている。宝の持ち腐れだなどといわれたいようにしたくないものである。博士遺族は博士と本学との深い因縁もさることながら、本学によってもっともよく活用してくれるであろうと期待して、一切を本学に託されたという。遺族の期待に答えることが、また博士の遺志にそう所以であると思う。

さいごに、私が直接石浜文庫の整理に関係している間に、ご助言ご鞭撻を賜った人々、とくに京都産業大学教授倉田淳之助、筑波大学名誉教授酒井忠夫両氏に対して深く謝意を表する。

(本学名誉教授 元附属図書館長)



夏は日のぞきうつくしく松をな——歌や——と。思  
おもひなりぬ花も散るをさすてはな　まてひ  
きりふくなく　枝のあつむを田舎より  
ありけやあらうともそは　世にかなひ人たほろ  
事なるあつてもあはれ　あはれまゝ不致  
竹馬鹿新　二度斬り　今なき人を言うつね  
わがこころはこれこそ　ほろわきを解く也  
し　腹もわらうてちよ　いふべき目も感  
事をもまれ　無常の世にまづうらや



蟠  
山片播桃

夢の代 1-12巻

文政3年書写本

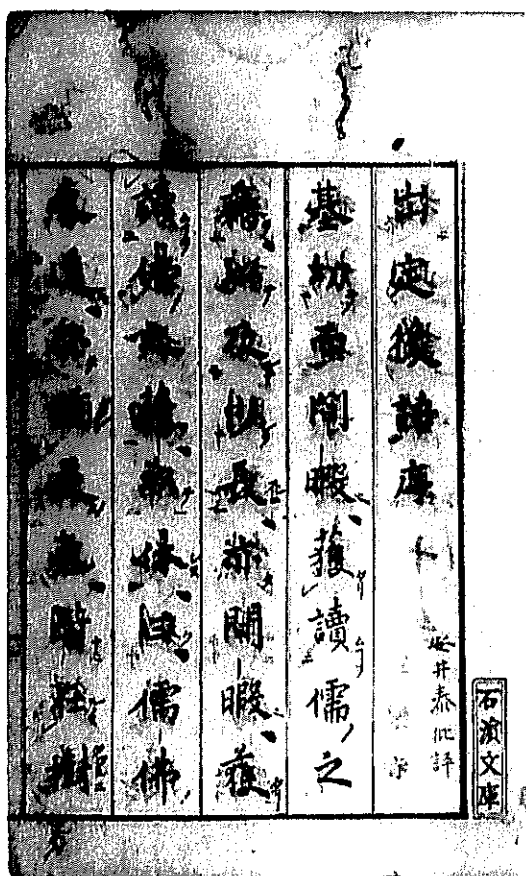
年々を去るのて世帯をた

[illegible]

腹形も非なりて子あべいありあかき  
りしきやわくを思ふなりやうき直方  
陸軍の海人これぞあかき

[illegible]

變之方



出定後語二卷

富永伸基

延享二年刊本

# 蒙古

蒙古新聞  
 編輯部  
 印刷部  
 發行部

蒙古新聞  
 編輯部  
 印刷部  
 發行部

蒙古新聞  
 編輯部  
 印刷部  
 發行部



蒙古新聞  
 編輯部  
 印刷部  
 發行部

蒙古新聞  
 編輯部  
 印刷部  
 發行部

## ■ 配布資料④展示資料解説(石濱文庫)

平成 26 年度 大阪大学職員研修 「石濱文庫の特色と今後の調査・研究に向けて」(堤一昭)

平成 26 年 12 月 10 日(水) 大阪大学総合図書館・図書館ホール

### ◆和書——近世大坂の文化史関係

※解説は『角川新版日本史辞典』を参考。

- (1) 【富永仲基『出定後語』二巻】(とみなが・なかもと、しゅつじょうごご)、延享二年(1745)  
刊本 [石濱文庫目録・漢籍の部G国書、p.202 下] : 歴史的見地から仏教の原典を批判し、大乘非仏説を説いた書。※回覧資料②「町人学者・石濱純太郎」8 参照。
- (2) 【木村兼葭堂『一角纂考』二巻】(きむら・けんかどう、いっかくさんこう)、寛政七年(1795)  
刊本 [石濱文庫目録・漢籍の部G国書、p.211 上] 博物学に関心があった兼葭堂によるイッカクの研究書。※同上 11 参照。
- (3) 【山片蟠桃『夢之代』十二巻】(やまがた・ばんとう、ゆめのしろ)、文政三年(1820)成立。  
写本[石濱文庫目録・和書 121.89Y27u、p.28 左] 山片蟠桃の代表著作。※同上 11 参照。

### ◆漢籍——西夏語・モンゴル語文献、中国近代諸学者の文字学の業績

- (1) 【『番漢合時掌中珠』一巻】(ばんかんごうじしょうちゅうしゅ) 民国 13 年(1924)石印本  
[石濱文庫目録・漢籍の部 B 史部 第一三政書類 八 交渉之属、p.51 上]  
ロシアのコズロフ探検隊がカラホト遺跡(黒城、現 中国・内モンゴル自治区)で発見した西夏語・漢語の対訳語彙集で、西夏語研究の重要文献。※うら面A「コズロフ探検隊」「西夏文字」(『世界の歴史 6』中央公論社、1961 年、pp.151-155)参照。
- (2) 【『元朝秘史』十巻・続集二巻】(げんちょうひし)、“景鈔本”(けいしょうほん) [石濱文庫目録・漢籍の部 B 史部 第五別史類 元、p.29 下]  
『蒙古(モンゴル)の秘史』などとも呼ばれ、モンゴルの族祖神話からモンゴル帝国の初代チンギス・カン、次代オゴデイの事蹟を記した書物。モンゴル語の原文を漢字音写した本文に白話漢語の逐語訳を付し、さらに一節ごとに別種の漢語訳を載せる三言語並記の形態でのこる。日本の『古事記』に相当するような、モンゴルの民族的古典である。  
1902 年に清朝の学者・文廷式からこの書の鈔本(写本)を贈られた内藤湖南は、それを忠実に写した鈔本(“景鈔本”)を作らせて那珂通世らに贈った。那珂はこの書の世界初の翻訳・研究書である『成吉思汗實録』(1907 年)を刊行した。日本のモンゴル学の出発点である。展示したこの鈔本は、内藤所蔵のものから写された可能性があり、さらなる研究が待たれる。
- (3) 【羅振玉輯『殷墟書契前編』八巻】(らしんぎょく、いんきょしょけいぜんぺん) 1913 年 [石濱文庫目録・漢籍の部 B 史部 第一五金石類 九 甲骨之属、p.60 上] とびらの題字は内藤湖南(虎次郎)によるもの。 ※うら面Bの「甲骨文字研究の開拓者」(『世界の歴史 1』中央公論社、1960 年、pp.65-68)参照
- (4) 【王国維『觀堂集林』二十巻】(おうこくゐ、かんだうしゅうりん) 1923 年 [石濱文庫目録・漢籍の部 D 集部 第二別集類 一一近人之属、p.116 下]  
王国維の学術論文集。※展示した部分は、甲骨文字に見える殷の祖宗名と既存文献のそれとの対応を検討した論文。うら面Bの「大学者王国維の悲劇」(同上)参照。

◆**洋書**——20 世紀初めの中央アジア学術探検の成果から

【A. スタイン『千仏：敦煌の古代仏教壁画』】Stein, Aurel, *Thousand Buddhas: ancient Buddhist paintings from the cave-temples of Tun-Huang on the western frontier of China*, London, 1931. [石濱文庫目録・洋書の部 186.85 St 3t, p.279 左]

シルクロードのオアシス都市の一つ、敦煌(とんこう。中国・甘粛省)の郊外に、「莫高窟(ばっこうくつ)」または「千仏洞(せんぶつどう)」と呼ばれる石窟群があり、4 世紀から 14 世紀にわたる仏像と壁画、および 20 世紀初めに発見され、イギリスのスタイン、フランスのペリオ、日本の大谷探検隊らが本国に持ち帰った、多言語にわたる「敦煌文献」で知られる。展示資料は、スタインの第二次中央アジア学術探検(1906-1908)の成果の一つ。なお、敦煌は 1987 年にはユネスコ世界遺産(文化遺産)に登録され、観光地としても有名である。

◆**20 世紀前半の東北アジアと日本の関係を示す資料**

(1) 【Köke tuy (フフ・トグ、青旗)】新京(現 吉林省長春)、1940 年代前半。

満洲国の新京で発行されたモンゴル語新聞。当時の民族政策、モンゴル語・文学に関わる貴重な資料。ほぼ全号揃っているのは、世界でも石濱文庫のみである。※レジュメ pp.5～6 の「戦前期モンゴル語新聞『フフ・トグ(青旗)』のデジタル化と公開の可能性」参照。

(2) 【A. バラーノフ『バルガ』】ハルビン、1912 年：Барга, А. Баранов, Харбинъ, 1912.[292.25/B21b] ※配布資料①b、および裏面の田中克彦『ノモンハン戦争』(岩波新書,2009, p.44)参照。

◆**拓本**【魏靈藏薛法紹造像記】(ざれいぞうせつほうしょうぞうぞうき)

5 世紀末に平城(現 山西省大同)から洛陽(河南省)に遷都した北魏から、唐の時代にかけて、洛陽郊外の川沿いの崖にうがたれた一千以上の石窟が龍門石窟である。窟内に彫られた仏像のかたわらに造像の由来を刻んだ「造像記(ぞうぞうき)」の書が、18 世紀の清時代中期から高く評価された。石濱文庫は龍門石窟の造像記 681 枚が所蔵する。本品は、造像記の最高傑作「龍門四品」の一つ。龍門石窟で初期(6 世紀初)に造られた古陽洞の北壁上段の釈迦像の右側に刻された碑の形をした銘文で、魏靈藏と薛法紹の二人が国運と一門の繁栄、成仏を祈願したものである。整然とした力強い楷書の字形と古様さが書家に愛されている。

◆**書簡**【ネフスキーあてシュツキー書簡】(1928 (昭和 3) 年 5 月 2 日.ロシア文、漢文)

ロシア/ソ連出身の東洋学者ニコライ・ネフスキー(1892-1937)は、日本民俗学の研究を縁とした柳田国男、折口信夫との交流が知られている。大阪外国語学校のロシア語教師時期には、石濱純太郎とともに西夏文字の解読に取り組んで共著論文をいくつも発表した。石濱文庫にはネフスキーからの手紙のみならず、1928 年に来日したソ連の東洋学者ユリアン・シュツキー(シチュツキー、1897-1938)の手紙も遺されている。二人とも帰国後、粛清に遭った。『東洋学者・石濱純太郎をめぐる学術ネットワークの研究』(2013 年)に翻訳・解説がある。